

色弱(色覚異常)

色弱(色覚異常)とは、色の見え方や感じ方が、色弱(色覚異常)のない人たちと異なっている状態をいいます。人の目の網膜には、赤、緑、青を感じ取る視物質があり、これらの働きによって色を認識しています。しかし、色弱(色覚異常)の人はこの視物質が欠けていたり、十分な働きをしていません。そのため、特定の色の区別が難しかったり、文字や情報を見落とししたりしてしまうことがあります。

困っていることを理解しましょう

色弱(色覚異常)の人が区別することが難しい色の組み合わせを知ってください。

代表的なものは緑と赤です。緑色の黒板に赤色のチョークで文字が書かれている場合には、文字が書いてあることにすら気が付かない人もいます。

区別しにくい色の組み合わせ例



見え方の例



こんなことに配慮しましょう

色弱(色覚異常)の人は、日本では男性の20人に1人(5%)、女性の500人に1人(0.2%)、日本全体では320万人以上

とされています。これらの人は、一部の色の組み合わせについて色の感じ方が異なるため、日頃から区別しにくい色の組み合わせを避けるように心がけましょう。

カラーユニバーサルデザイン認証マーク



色覚の個人差を問わず、できるだけ多くの人に「情報の伝わりやすさ」や「使いやすさ」を配慮してデザイン(カラーユニバーサルデザイン)されていると認められた印刷物、製品類、施設などに、認証機構であるNPO法人CUDOから与えられるマークです。

特定非営利活動法人 CUDO (Color Universal Design Organization)

盲ろう

視覚と聴覚の両方に障がいのある人を盲ろう者といいます。全く見えなく聴こえないだけでなく、少し見えたり聴こえたりする人を含み、視覚や聴覚の単独の障がいとは異なり、個別性と多様性が高い独自の障がいとされています。全く見えなくて全く聞こえない「全盲ろう」、全く見えなくて少し聞こえる「全盲難聴」、少し見えて全く聞こえない「弱視ろう」、少し見えて少し聞こえる「弱視難聴」の大きく4つに分けられます。障がいの発症順や他の障がいとの重複などにより、その障がいの程度や状態は人によってさまざまです。

視覚、聴覚障がいに対する単独の援助に加え、手書き文字や触手話のような独自のコミュニケーションの援助が必要になります。社会生活の多くの場面で、盲ろう者とのコミュニケーションに習熟した専門の“通訳・介助員”の助けが必要となります。

困っていることを理解しましょう

視覚や聴覚からの情報を入手することが難しいため、人とコミュニケーションを

とることや外出など一人で移動すること、新聞・テレビ・パソコンやスマートフォンなどから社会情勢など情報を入手することに困難が生じます。

こんなことに配慮しましょう

盲ろう者かもしれない人に出会ったら、そつと肩や腕に触れてから手を取り、自分の人差し指で盲ろう者の手のひらに、ひらがななどでゆっくり大きめに文字を書いて話しかけてみましょう。または、盲ろう者の真正面に立って、大きく口をあけてゆっくり話しかけ

てみましょう。盲ろう者が聞き取れなくても、我慢強く、時間をかけてコミュニケーションをとることが大切です。音と光のない世界で生活し、孤独感を持ちやすい盲ろう者にとって、人との出会いが、社会と自分をつなぐ大切な「架け橋」となり、さまざまな支援を受けるための第一歩となる可能性があります。

手書き文字



盲ろう者の手のひらに指でひらがななどを書いて伝えます。

音声



盲ろう者の真正面に立って、大きく口をあけて、ゆっくり話しかけることで伝えます。

触手話



話者の手話の形や位置を盲ろう者が手で直接触れることで読み取ります。